

◆【海員随想】ブリ 長田武士

ブリは5～6月ごろ日本海沿岸を北上し、冬は南下する温帯性の回遊魚。寒ブリというように師走の寒い時期が旬であることから、ブリに「鰯」の漢字が当てられたとか。

昔、武将は出世するたびに名前を変えている。例えば「秀吉。最初は日吉丸、木下藤吉郎、羽柴秀吉。天正14年、太政大臣となり正親町天皇より豊臣の姓を賜っている」それにあやかってブリは出世魚といわれていることはご存知の通り。

福井県ではアオコ、イナダ、ツバス、フクラギ、ハマチ、ツラサナル、マルゴ、ブリ、と成長するにつれて名が変わる。通常8キロ以上をブリと呼ぶ。

ブリは俊敏な魚で、古代の稚拙な漁労技術では捕獲できなかった。ブリは記紀や万葉集にも登場せず、平安時代の「延喜式」にも見られない。鎌倉時代になってようやくハマチの名が文章に見られるようになる。文永10（1273）年8月1日付の汲部（釣部）、多鳥（田鳥）、両浦はまちアミの事…という秦家文書がある。これは両浦共同体にハマチ網漁を認めた下文であるが、網の構造など詳しいことは分からない。

丹後伊根浦の建刺網によるブリ漁が始まったのが明応年間（1492～1501年）という。伊根は後に丹後ブリで有名に。若狭国守護武田氏の支族、武田信高氏へ常神半島の神子浦から納めた海産物を記録した宮川肴代日記という古文書がある。天文21（1552）年6月から12月の5カ月間に、多くの海産物が納められているなか、10、11月にブリ4回、小ハマチ2回、ハマチ・塩ハマチ・フクラギ各1回が記載されている。

このころには若狭でもブリ漁は盛んになっていた。「若狭国志」（1749年）に「高浜の海人之を漁し京師へ売りに出す。世に若狭鰯と称すもの」とあり、若狭ブリの名が京で知られていたようである。江戸時代小浜藩から寒中に若狭ブリが将軍家へ献上された。

そのため藩主酒井忠勝公（小浜12万石、後大老となる）は、「鰯一駄霜月初より15日迄之間に指下可申候事」と陰暦11月に献上品「若狭鰯」を江戸へ送るように指示している。このブリは生ではなく塩ブリであった。

また、寛永19（1642）年、忠勝公が小浜に滞在していた時、徳川御三家の尾張家や大目付の柳生但馬守宗矩に寒ブリを贈るよう指示している。若狭の殿様は外交上手で、ブリもその一役を担わされていた。

明治38年、ブリ大敷網が大飯郡に導入されたことを契機に、若狭湾沿岸の定置網漁業が急速に発展したおかげで、ブリの漁獲量が増大している。北陸地方の冬雪まじりの雨とともにとどろく雷を「鰯おこし」と呼ぶ。寒ブリの群れの到来を予感させる身が締めり油の乗った寒ブリは、西日本では正月魚として珍重されている。刺し身、照り焼き、ブリ大根、いずれも美味。ブリシャブは身も心も温まる冬ならではのごちそう、とそばのラジオは「県漁連敦賀支所初競り活況本マグロ1本4百万円也競り落とし関西方面の料亭へ」と告げていた。

「海員だより」